劉勇氏の発言

劉勇

✧　大連羅振玉甲骨文書画芸術センター　秘書長

✧　大連唐鴻臚井刻石記念館　副館長

✧　旅順文化観光シンクタンク　専門家

✧　大連大学シンクタンク　近代史専門家

みなさん、こんにちは。

大連唐鴻臚井刻石記念館の副館長の劉勇です。まず、本日の集会を企画・準備されました日本側の友人をはじめ、ご来場の皆様に厚く御礼申し上げます。そして、井上亮さんにご講演を賜ることを大変うれしく存じます。ご講演から新たな内容や視点を得ることを期待しております。

2018 年 3 月、大阪のある本屋で井上亮様が執筆された『天皇の戦争宝庫』という本を購入して拝読しました。日本に略奪された中国の文化財について理解をより深めることができました。また、本の中で見つけた日本の皇居に置かれていた唐碑亭の側面写真は、違う角度で撮られた鴻臚井刻石の3枚目の写真となります。これは私たち鴻臚井刻石の研究者にとって非常に貴重なものです。

2018 年の春節から、弊館の館長である楊岳有氏とともに、日本の皇居に数回にわたって手紙を送ってきました。福字（「福」と書かれた赤い紙）や対聯（ついれん、招福祈願の飾り物）を同封し、鴻臚井刻石に対して地元の人々の思いを伝えるとともに、刻石についての情報も尋ねていた。しかし、本日に至るまで、一切の返答はありませんでした…

中国の市民と日本の有識者が刻石の返還を求める声に、日本政府は耳を貸すべきです。現在の日本政府は国際法を尊重すると公言している以上、「ポツダム宣言」や「サンフランシスコ平和条約」などの関連条文に基づき、唐鴻臚井刻石を元にあった場所である中国の旅順に返還すべきです。世界の潮流に順応し、率先して文化財の返還に取

り組むことこそが、日本政府に求められるべき姿です。

先月、中国の鴻臚井碑研究者である王仁富氏がこの世を去りました。彼が残した一節は私たちの耳に響き続けています。

毎日の夕日は、待ち焦がれる眼

毎回の佳節は、暗然と落ち込む心

秋雨が降れば、涙で衣をうるおし

春風が吹けば、また希望を抱く

唐鴻臚井刻石が一刻も早く故郷に帰ってくることを願っています。

最後に、井上亮氏のご講演を含め本日の集会のご成功を祈念いたします。

ありがとうございました。

2023 年 11 月 11 日

孫彦華氏の発言

孫彦華

- ✧ 大連市旅順口区華仁文博園 代表取締役
- ✧ 旅順唐鴻臚井刻石記念館 館長
- ✧ 中国写真家協会 会員
- ✧ 旅順写真家協会 会長

この彫像は、唐碑の創意者であった唐の鴻臚卿の崔訢氏のイメージを作ったものです。西暦 714 年に鴻臚卿崔訢氏が今の吉林省に訪れ大祚栄氏を冊封した後、5 月 18

日に帰途にある旅順黄金山の麓に井戸を 2 つ掘り、石碑を建てました。唐碑返還を求めてきた先駆者の王仁富先生が 30 年以上も全力を傾けて返還を追究されてきたから、私は鴻臚卿崔訢氏の彫刻像を設計する際に王仁富先生の画像も参考にしました。

この扁額は王仁富先生が亡くなられる前に唐鴻臚井刻石研究会会長の黄明超さんに依頼して制作されたものです。今年 8 月 18 日に扁額が制作されてからずっとここに掛けてきました。扁額を掛けた日は、旅順鴻臚井刻石記念館の開館日だと思っています。

この碑亭は、私が 2019 年に制作した鴻臚井刻石のレプリカであり、日本の皇居に略奪された鴻臚井刻石を恋しく思うことを示すものとして、記念館の一部になっています。この石碑の現物が 100 年以上前にすでに日本の皇居に運び出されてしまいましたが、中国人は一日もそれを忘れたことがありません。何故なら、この石碑は唐と中国少数民族との様々な友好関係を象徴しているからです。

法律論から見ると、第二次世界大戦の戦勝国の国民として、中国人は、中国の国宝であるこの石碑が戦利品として日本の皇居に隠されることを受け入れません。そして私たちは日本政府と皇居に強く求めます：この国宝をもとの場所、旅順に返還してほしいです。私は旅順の市民として、多くの旅順人を代表し、国宝の早期返還を求める願いをここで表明させていただきます。

姫巍氏の発言

姫巍

✧ 「大連市民唐鴻臚井刻石追討 714 志願会」発起人

✧ 「周文書院」輪番院長

皆さん、こんにちは。「大連市民唐鴻臚井刻石追討 714 志願会」発起人の姫巍と申します。「周文書院」の輪番院長も務めております。

現在、私は大連市の中心地、また大連市の発祥地でもある中山広場を背景に、私たち 714 有志の会の過去 10 年間の活動と成果を皆さんに簡単にご紹介します。

2014 年に生生画廊で「陳士斌甲午海戦 120 周年記念油絵展」で、王仁富先生、王錦思先生のご支持のもと、大連課題グループが設立されました。

2015 年に第 5 回全国唐鴻臚井刻石シンポジウムを開催し、全国各地からの来賓を集めて最大規模の遺跡現場見学を案内しました。

2016 年から今日に至り、大連市民万人署名活動を図ってきました。最初は李新さんが庄河花園口から黄金山遺跡まで徒歩しながら、宣伝活動をしました。それから、この線路に沿って、それぞれの中小学校で講演会を行いました。これらの活動を通じて、現在の署名人数が 7000 人近くに達しています。

2018-2020 年、714 有志の会の顧問及び大連鴻臚井記念館の楊岳有館長は、二度日本の天皇及び宮内庁に書簡を送り石碑を皇居から出すように求め、コロナ禍の期間中に中国の春節の飾り「福」の字を送り、福を祈る意を表しました。

2021 年から、714 有志の会は彫刻文化芸術の創作普及活動を行い、各界の書道絵画彫刻家及び文学詩歌作者を動員し、「盛唐使節、立碑銘志」をテーマに創作を行った。遼寧省文旅庁博物館文創大会の 2 等賞を受賞した作品もありました。

6- 714 有志の会は学術研究の探索も行っています。副会長の隋生氏は近年、旅順博物館月刊誌などで一連の重要論文を発表し、歴史的脈絡の解明を進めています。副会長の劉楠氏は近頃、日本出版の地図と内藤湖南著の中国史専門書の中で、旅順における石碑の元の場所及び皇居振天府の場所に関する明確な記載を発見しました。

皆さん、来年は石碑創立 1310 年目です。我々大連市民 714 有志の会はさらに努力し、日本の 500 人の議員に唐碑返還を呼びかける手紙を出すこと、映画とテレビドラマを撮影すること、芸術文化制作展を開催することなど、さまざまな活動を行い、返還運動を推進していきます。ありがとうございました。

姜学東氏の発言

姜学東

✧　遼寧省伝記文学協会　常務理事

✧　遼寧省海城市作家協会　常務副主席

✧　遼寧省海城市善医堂石獅子追討後援会　常務副秘書長

石獅は原(もと)より三学寺に駐(す)み　我は剣犂(けんれい)のために不平を鳴らす

尊敬する皆様、立冬の節を健康に過ごすようお祈りします。

まず日本の「進める会」が発起した中国文化財返還促進運動に心から変わらぬ支持の意を表します。今年、「進める会」の皆さまにわざわざ国境を越え、海城市にやってきて、座談会まで参加していただいたことに心から感謝いたします。今日のこの素晴らしい時に、思わず感無量になります。優秀な民族には、それぞれの時代に、智慧をもって物事を考え、未来を見据えた決断と行動を起こす優れた人が必ず出てきます。いわゆる「智者惑わらず」というのは、優秀な皆さまのことです。

文化財の元住所の原住民代表として、本日は 100 万人の海城市民を代表してここで厳粛に声を上げさせていただきます。海城市三学寺の文化財である石獅子を一日も早く戻すように日本政府に強く呼びかけします。なぜならば、市民が、市民こそが歴史の創造者であり、石獅子が中国海城の所有であることは国際法に公認される争わない事実だからです。いわゆる「仁者は擾(みだ)らず」とは、仁者の政府は公共心を持ち、私欲を捨て、得失を患わずにすれば、大同世界に達することができるとのことです。

歴史を直視できない民族は先が見えず、反省できない人間は他人からの尊重を得ないでしょう。剣（武器）を溶かして犂（農具）に鋳れば過去を水に流すことができるが、断固に過ちを認めないのは横暴でしかありません。今後、私たちは、海城市民万人大署

名活動、三学寺国宝記念講座、三学寺石獅子に関する動画や手作り記念品など行事を開催し、海城市民ひいては中国国民に石獅子の痛みを永遠に覚えさせようと精一杯努力することをここで宣言します。

日本の長屋王が『繍袈裟衣縁』に「山川異域、風月同天。寄諸仏子、共結来縁（別の場所に暮らしていても、自然の風物はつながっている。この袈裟を仏弟子に喜捨し、共に来世での縁を結ぼう）」を記したように、日清戦争による海城石獅子の痛みが過去のものとして消え去り、「戒定慧」の知恵を活かして、国宝が早期に返還されることを願っております。すなわち「君と恵沢を共有し、諸君と共に未来の縁を結ぶ」ことです。

童増氏の発言

童増

✧　中国民間対日賠償請求連合会　会長

✧　中祥投資有限公司　代表取締役

皆さん、こんにちは。中国民間対日賠償請求連合会の会長を務めさせていただきます、童増です。まず冒頭に、中国民間対日賠償請求連合会を代表し、本日井上亮様のご講演が行われることを心よりお祝いを申し上げますとともに、ご成功をお祈りいたします。

今年の9月29日に、弊会と日本の中国文化財返還運動を進める会は、「中国文化財の返還を実現するための日中民間共同宣言」に署名しました。歴史を遡ってみれば、最初は民間から始まり、その力で両国政府を後押しし、最終的に問題解決につながったことが多々あります。この共同宣言は、日中の民間交流史において非常に珍しいものであり、民間レベルで事業を共同で推進することを通じ、日中両国の友好促進を図るた

めでもあります。現在、すでに2社の出版社と連絡を取り、進める会が発行された文化財返還に関する論点や研究成果をまとめたブックレットを中国で出版し、より多くの中国人に日本の学者の真の視点を伝えることに努力しています。これは私たちにとって大きな励みになるでしょう。

共同宣言に署名することは、メディア報道、記事宣伝、署名活動等を通して多くの人々が自主的、自発的に返還運動の輪に加わり、中国の民間活動の裾野を広げていく一つのきっかけとなるでしょう。今から見ると、これまで両国の有識者間で築いた架け橋と友情は、中国で着実に広まっています。今後もお互いに協力し、多くの分野で日本側と連携し、特に中国から奪われた文化財の返還を求める運動に力を入れ、必ず実現できると信じています。

最後に、井上亮さんの素晴らしいご講演に感謝いたします。さようなら！